

• Nature of Man •

創造主の一大傑作

人間



“イエスの如くに 我はならまし このねぎごとぞ ひたすらなる”

創造主の一大傑作
人間

序

このシラバスの目的は、贖いの計画との関係における人間の性質の詳細な研究を手助けすることである。これはあらゆる真の教育の基礎である。

「教育という働きに包括されている内容を理解するには、人の性質と、人を創造された神の御目的とを考えてみなければならない。同時にまた悪の知識がはいつてきたために生じた人間の状態の変化と、人類の教育についての大いなる御目的を今もなお成就されている神のご計画を考えてみる必要がある」（教育 4）。

人間の性質の研究をすることが今日特に大切な理由は次のとおりである：

1. サタンは二大誤謬を通してキリスト教世界を一つにしようとしているが、人間の性質に関する誤謬はそのうちの一つである。
2. 神の民の間に現存している、キリストの受肉に関する誤解や思い違いは、主として人間の性質を理解していないことから生じている。
3. 「前の雨」の働きを知的に評価できるようになるためには、まず、悔い改め、聖化、クリスチャン経験などが人間の性質についての正しい見解の中で考察される必要がある。
4. 教会は今、クリスチャンの**完全**に関して激しい議論をしている。人間の性質への適切な洞察がなければ、クリスチャンの完全を正しく理解することはできない。
5. 健康改革の重要なメッセージは、それが人間の性質との関係の中で研究されるときにはじめて、その適正な位置に置かれたといえる。
6. 神の民のためになされる、この時代の特別な働きは、この地上からの**昇天**に準備することである。ただ人間の性質についての注意深い研究だけが、その準備に伴うものに関する知的な理解を与えてくれる。

この研究はすべてを完全に網羅したものとは思っていない。願わくは、生徒の心の前に新たな瞑想の分野が開かれ、それがその人にとって、これらの研究に沿ったさらに深い研究への励ましとなりますように。

目 次

第1課	人間の創造	1
第2課	人間の墮落	19
第3課	キリストの人性.....	31
第4課	贖罪における人性	47
第5課	回心における人の性質	64
第6課	聖化における人間の性質	79
第7課	聖所の清めと人間の性質（1部）	93
第8課	聖所の清めと人間の性質（2部）	100
第9課	聖所の清めと人間の性質（3部）	125

資料の略名

1BC	The Seventh-day Adventist Bible Commentary, vol. 1 (2BC, etc., for vols. 2-7)	セブンスデー・アドベンチスト聖書注解、第1巻（第2巻は2BC、全集7巻まで）
CH	Counsels on Health	健康に関する勧告
CS	Counsels on Stewardship	管理者の務めに関する勧告
CT	Counsels to Teachers, Parents, and Students	教師・両親・生徒への勧告
Ev	Evangelism	伝道
FE	Fundamentals of Christian Education	クリスチャン教育の基礎
GW	Gospel Workers	福音宣伝者
LS	Life Sketches	ライフ・スケッチズ
ML	My Life Today	マイ・ライフ・トゥデイ
MM	Medical Ministry	メディカル・ミニストリー
OHC	Our High Calling	われらの高き召し
QD	Questions on Doctrine	教理に対する質問
RH	Review and Herald	レビュー・アンド・ヘラルド
SD	Sons and Daughters of God	神の息子・娘
1SG	Spiritual Gifts, vol. 1	霊の賜物、第1巻
2SG	Spiritual Gifts, vol. 2	霊の賜物、第2巻
3SG	Spiritual Gifts, vol. 3	霊の賜物、第3巻
4SGa	Spiritual Gifts, vol. 4, part 1	霊の賜物、第4巻、第1編
4SGb	Spiritual Gifts, vol. 4, part 2	霊の賜物、第4巻、第2編
SL	Sanctified Life	清められた生活
1SM	Selected Messages, book 1 (2SM etc. for books 2 and 3)	セレクトッド・メッセージズ、第1巻（第2巻、3巻は2SM、3SM）
ST	The Signs of the Times	サインズ・オブ・ザ・タイムズ
1T	Testimonies for the Church, vol. 1 (2T, etc., for vols. 2-9)	教会への証、第1巻（第2巻は2T、全集9巻まで）
Te	Temperance	節制
TM	Testimonies to Ministers and Gospel Workers	牧師と福音宣伝者への証
WM	Welfare Ministry	福祉の奉仕

あ上、下	人類のあけぼの・上巻、下巻
安勸	安息日学校への勧告
生残	生き残る人々
家教	家庭の教育
患上、下	患難から栄光へ・上巻、下巻
キ実	キリストの実物教訓
希上、中、下	各時代の希望・上巻、中巻、下巻
キ道	キリストへの道
教育	教育
国上、下	国と指導者・上巻、下巻
祝福	祝福の山
食勸	食事と食物に関する勧告
初文	初代文集
健やか	健やかな生き方
青年	青年への使命
大上、下	各時代の争闘・上巻、下巻
ホーム	アドベンチスト・ホーム
ミニ	ミニストリー・オブ・ヒーリング

It's so CONFUSING!

混乱だ!

モリス・ベンデン

ジョージ・ナイト

ジャック・セクエラ

ラルフ・ラーソン

グラハム・マックスウェル

"I don't know what to believe about the gospel. The more I study, the worse it gets!"

Such is the frustration of many Adventists. They hear five beloved and persuasive leaders say different things about salvation. All appear to be reasonable and sincere. Who's got the truth?

Morris Venden? George Knight? Jack Sequeira? Ralph Larson? Graham Maxwell?

All five have much to contribute in terms of understanding the gospel, and there are similarities in what they teach. But there also are significant and conflicting differences.

In *Who's Got the Truth*, Martin Weber, author of *Adventist Hot Potatoes*, presents a Berean inquiry into five recent gospels in the Adventist Church.

- "We've never had a book quite like this."
- "272 action-packed pages."
- "probing questions, revealing answers."
- "candid commentary and vigorous dialogue."

まったく混乱だ!

「福音について、私はもう何を信じたらいいかわからない」

これが多くのアドベンチストたちのフラストレーション(失望)である。救いについて、5人説得力のあるリーダーたちの違った意見に耳を傾ける。それぞれ道理にかなっているように見える。誰が真理を持っているのだろうか?…

モリス・ベンデンか、ジョージ・ナイトか、ジャック・セクエラか、ラルフ・ラーソンか、グラハム・マックスウェルか? それぞれ共通しているところもあるが、かなり相反するところもある。…とマーチン・ウェーバーは言う…(ミニストリー誌、1994年、9月)

「教団は、信仰による義認の理解にきわめて重要な分野—キリストの性質、完全、原罪—についての意味を明らかにすることが出来なかった。その結果教会の内部に様々な神学の思潮が存在するようになり、わが教会員を混乱状態に陥れた」(フランスシス・キャンベル、元アフリカ、ユニオンカンフェランス総理)。

「…我々は神学的荒野をさまよってきた。しかも、これらの点で互いに矛盾する見解を持っていたので、我々のメッセージと我々の任務を明確に定義づけることができなかった」(デニス・ブリービー)。

「俗受けのする神学の誤りが、多くの者を懐疑論者にしてしまった」(大下 270)。



「…至る所の教会員たちが、アドベンチスト運動の第一の優先事は、組織的なものではなくて、霊的なもの、神学的なものでなければならないという確信において、教会の指導者たちと一致しました。たとえ私たちが、最も素晴らしい現代の経営原則を取り入れて、理想的な世界的事業を築いても、どのようにしたら、教会がその特異なメッセージを全世界に宣べ伝えることができるかを、はっきり理解しないならば、私たちの使命は失敗に終わるでしょう。教会の使命は正しい神学にかかっています」(ロバート・ピアソン 1966~1979 の SDA 世界総会総理)。

「教会の清めの日は急速に近づいている。神は清い、真実な民をお持ちになるであろう。まもなく起こる大いなる震いにおいて、イスラエルの力が分かるであろう。様々なしるしは、主がみ手にうちわをもって、その打ち場(教会)を徹底的にお清めになる時が近づいている事を示している。大きな混乱と困惑の時代が急速に近づいている」(5T 80)。

「真理と神の栄光とは、切り離すことができない。われわれは、手近に聖書を持っていながら、誤った見解をもって神を あがめることはできない。多くの人々は、生活さえ正しければ、何を信じているかは問題ではないと主張する。しかし生活は信仰によって形造られる。光と真理が手近にありながら、それを聞き、それを見る特権を利用するのを怠るなら、われわれは事実上それを拒絶し、光よりもやみを選んでいくことになる」(大下 364)。

第1課 人間の創造

参考：エペソ 1-3 章；人間の尊厳第 1 章、付録「高い性質と低い性質」

研究ガイド

人間の創造の目的

1. 考えるべきこと。

「人の性質と、人を創造された神の御目的とを考えてみなければならない」（教育 4）。

2. 神の栄光のために子たる身分。

「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、わたしたちに、イエス・キリストによって**神の子たる身分**を授けるようにと、御旨のよしとするとところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである。これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである。・・・それは、早くからキリストに望みをおいているわたしたちが、**神の栄光をほめたたえる者**となるためである」（エペソ 1：4, 5, 6, 12）。

3. 人が宇宙に神の品性を明らかにするという永遠の計画。

「すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、更にまた、万物の造り主である神の中に**世々隠されていた奥義**にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。それは今、天上にあるもろもろの**支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るため**であって、わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された神の永遠の目的にそうものである」（エペソ 3：8-11）。

4. 内住する創造主のための宮。

「輝く聖なるセラフから人間にいたるまで、すべての被造物が創造主の内住される宮となることが、永遠の昔から神の目的であった」(希上 186)。「我々は神の作品であり、み言葉は我々が『恐るべく、くすしく造られた』ことを宣言している。神は精神のために、この驚くべき住居をお備えになった。それは、聖霊が宿るために、主ご自身が据え付けられ、『入念につづり合わされた』宮である」(健やか 7, 8)。

5. 神の栄光を啓示する。

「神はご自身の栄光のために人間をお造りになった。テストと試練の後、人類家族は天の家族とひとつになるはずであった。もし彼らが神のすべての言葉に自らが従順であることを示すなら、人類を天国に住まわせるのが神の目的であった」(1BC 1082)。「神の栄光は、神のみかたちに人を創造することにおいて、また人の贖いにおいて示される」(6BC 1105)。「神は、創造の最高作品である人間が、すべて人間より下等なものにまさって神の思想をあらわし、その栄光を示すように望んでおられる」(ミニ 388)。

6. 神をあがめ、他を祝福するため。

「多くの人々は、自分たちが創造された目的を誤解している。それは、自分を楽しませ、自分をあがめられるためではなく、人類を祝福するため、そして神があがめるためであった」(4T 354)。「青年たちに、彼らの造られた目的が、神をあがめ、同胞を祝福することであることを理解させよう」(あ下 263)。「『神は自分のかたちに人を創造された(創世記 1:27)』とするされている。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいつそう明らかに創造主の栄光を反映することであった」(教育 4)。

7. 神と天使たち、そしてお互いと交わるために創造された。

「人は神と交わるためにつくられたので、人間の真の生活と発達は、神との交わりの中でのみ見いだされる。人間は、神の中に最高の歓喜を見いだすように造られているので、他のどんなものによっても、心の切なる願いを満たし、魂の飢えとかわきを満たすことはできない」(教育 134)。

「天使との交わりのために創造された人の心・・・」(キ実 181)。

「主は人間を交わりのためにお造りになった。主は、我々がキリストの親切で愛情深い性質に満たされるようになること、そして交わりを通して、神の子として互いに親密な関係に結ばれ、現在と永遠のために働きをするようになることを計画しておられる・・・」(MM 48, 49)。

8. 無我のうちに幸福をみいだすために創造された。

「神が人をお造りになったのは、人を幸福にするためであった」(キ実 268)。「他人の幸福を求めることは、真の幸福をみいだすことのできる道である。人は、神と同胞を愛することによって、自分の不利になるように働いているのではない。人の精神が無我であればあるほど、その人は幸福になる。なぜならその人は、その人に対する神の御目的を果たしているからである。その人は、神の息を呼吸して、喜びで満たされる。その人にとって人生は聖なる責任であり、その人の目には尊いものに見える。なぜなら人生は他人に仕えてこれを過ごすために、神によって与えられているものだからである」(CS 24, 25)。

9. キリストとみ座を共にするために創造された。

「神は、みこころのままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、あらかじめ決めておられたのです。・・・私たちは彼にあって**御国を受け継ぐ者**ともなったのです」(エペソ 1: 5, 11 〈欽定訳〉)。

「もし子であれば、**相続人**でもある。神の**相続人**であって、キリストと**栄光**を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと**共同の相続人**なのである」(ローマ 8: 17)。

「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである」(ヘブル 1: 3)。「勝利を得る者には、**わたしと共にわたしの座につかせよう**。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその**御座**についたのと同様である」(黙示録 3: 21)。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しほむことのない**資産**を受け継ぐ者として下さったのである」(I ペテロ 1: 3, 4)。

「仲保者イエスは、彼の血を信じる信仰によって勝利したものがみな、その罪を許され、再びエデンの家郷にもどって『以前の主権』を彼とともに継ぐ者となるように、嘆願されるのである(ミカ 4: 8)。サタンは、人類をあざむき、誘惑することによって、人類創造における神のご計画を挫折させようと考えた。しかし、キリストは今、人間が墮落しなかったかのように、この計画の実行を求められるのである。キリストは、ご自分の民のために、完全で十分な許しと義認だけでなく、彼らが、**ご自分の栄光にあずかり、ともにみ座につくこと**を求められるのである」(大下 216)。〈あ上 403 も参照〉

神のみかたちに造られた

1. 人間は神のみかたちに造られた。

「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものつとを治めさせよう』。神は**自分のかたちに人を創造**された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された」(創世記 1: 26, 27)。

2. エホバの型(見本)。

「エホバは、**ご自身の型**を与えておられる。というのは、人は**神のみかたち**にかたどって造られたからである」(健やか 7)。

3. 神の子。

「アダムは、土のちりで造られたが、『神の子』であった(ルカ 3: 38)」(あ上 18)。

「人間は、**外観**においても、**品性**においても、**神のかたち**を保っているはずであった。キリ

ストだけが、天の父の『本質の真の姿』ではあるが、人間は、神に似せて造られたのである（ヘブル 1:3）。彼の性質は、神のみ旨と調和していた。人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしていて、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった」（あ上 20）。

4. 新しい、特異な被造物。

「全天が世界のそして人間の創造に対して、深く喜ばしい関心を抱いた。人間は全く新しい、異なった被造物であった。彼らは『神のかたち』に造られた。そして彼らが地球に住みつくことは、創造主の意図されることであった」（1BC 1081）。

5. 人間だけが神の性質にあずかる者。

「神は人間をすぐれた者として創造なさった。人間だけが、神のみかたちに造られ、神の性質にあずかる能力があり、自分の創造主と協力して神の御計画を遂行する能力がある」（SD 7）。

6. 肉体と知能と霊性は、神のみかたちをそなえていた。

「アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能と霊性は、神のみかたちをそなえていた。『神は自分のかたちに人を創造された』（創世記 1:27）とされる。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいっそう明らかに創造主の栄光を反映することであった」（教育 4）。

7. 神の写し。

「人間は神の創造の最高傑作であり、神のみかたちに似せて造られ、神の写しとなるように計画された。しかしサタンは、人間のうちにある神のみかたちを消し去って、自分自身のかたちを人間に刻み込むために力を注いできた」（RH 1895/6/18）。

8. 創造の最終的なわざ。

「神は、この惑星を加えて、ご自分の創造のわざを終えられた」（Bible Echo 1888/1/1）。

天使たちとの比較

「あなたは、しばらくの間、彼を御使たちよりも少しく低い者となし・・・欽定訳」（ヘブル 2:7）。

1. 天使の地位にまでほとんど達する。

「人間は、天と地をむすぶ輪をつくるほど、高められる。人間は、創造主のみ手から均整のとれた品性をもって現れた。人間は、神の感化力と人間の努力を結合して、天使の地位にまで自分を高めるほどの進歩する能力が授けられた」（4T 340）。

2. 天使たちと同等なもの。

「神は、み子と相談して、ご自分らのみかたちに人間を創造する計画をお立てになった。人間は恩恵期間（試験期間）の下に置かれた。人間はテストされ、試されることになっていた。もし彼が神のテストに耐えて、最初の試験の後でも忠実そして誠実であり続けるならば、彼は、絶え間ない誘惑で攻撃されずに、天使たちと同等なものに高められて、その後は永遠に死なないはずであった」（RH 1874/2/24）。

「その後、アダムは神のみかたちに創造されて、恩恵期間（試験期間）の下に置かれた。彼は完全に発達した組織をもっていた。彼のすべての機能は調和していた。彼のすべての感情、言葉、行動において、自分の創造主のみ心と完全な一致があった。神が人間の幸福のためにすべての備えをし、彼のすべての必要をお満たしになった後、神はアダムの忠誠をテストされた。もし聖なる夫婦が従順であるなら、人類はしばらくの後、御使たちと同等なものにされた」（RH 1874/2/ 24）。

3. 天使たちの上に高められる。

「神のみかたちに一致しようと努力する人類には、豊かな天の宝とすぐれた力と与えられて、墮落したことの無い天使たちよりもさらに高い地位におかれることになるのである」（キ実 143, 144）。

「栄光の天使たちは、与えること—墮落してきよくない魂に愛としんぼうづよい見守りを与えることによるこびを感じる。天使たちは人々の心に愛をささやく。彼らはこの暗い世に天の宮廷から光を持って来る。やさしく忍耐強い奉仕によって、彼らは失われた魂を、彼ら自身が知ることができるよりももっと密接なキリストとのまじわりにはいらせるために、人の心に働きかける」（希上 3）。

M・L・アンデレアセンのコメント。

「『しばらくの間、彼を御使たちよりも低い者となし・・・』（ヘブル 2：7）。多くの点で人間が天使たちよりも今は低い者であるということは、明らかである。しかし、人間が高い者になるという可能性を秘めていることも、同様に明白である。

天使たちは力に卓越している。光の速さよりも速く移動する。人間には与えられていない力をもっている。（詩編 103：20、ダニエル 9：21、イザヤ 37：36、列王記下 19：35）。天使たちは、地上の偉大な者たちにさばきを宣告し、執行する。神の聖徒たちを守り、彼らのまわりに陣を敷く。サタンをつなぎおく力をもっている。（ダニエル 4：13, 17、詩編 34：7、黙示録 20：2）。

他方、人間はもっているが、彼らには与えられていない事柄もある。天使たちは、単一の存在であり、我々の知っているような愛情のきずなで結ばれている家族生活はない。天使たちには、父親、あるいは母親、兄弟、姉妹、息子、娘はいない。彼らは結婚しない。故に、人生で最も深みのあるいくつかの経験を知らない。天使たちは、幼年時代の喜びを知らず、この世に新しい生命を誕生させることも、母親あるいは父親になる喜びを感じることもない。また反対に、不安な思いでわが子を看病し、その生命がだんだん衰弱して行くのを見るような苦境を通ることもない。夫婦の愛、父母の愛、またそれに伴う悲しみなどの深く高尚な経験は、天使たちには与えられていない。

天使たちには、福音を宣べ伝えることは委託されていないし、自分の信仰のために苦しんだり死んだりすることも許されていない。彼らは、投獄または拷問に直面したことはない。また彼らは、罪のぬかるみから神の国に引き上げられることの非常な喜びも知らない。回心は、個人的な体験としては彼らには理解できない。また彼らは、罪のゆるしの優しい知らせを聞いたこともな

第1課 人間の創造

い。我々の判断では、我々がこの世で知っている人生の最も深く尊い経験は、彼らには与えられていない。彼らは現在、人間の知恵をはるかに超えた知恵をもっているが、それでもある点においては、人間は彼らよりも高い者である。

天使たちは我々の全く知らない力と機会をもっているかもしれないが、人間は、神のご計画の中で天使たちよりも高い地位を受ける運命にあるのかもしれない。この主題を更に深く追求しなければ、我々はただ、天使たちは仕える霊であって奉仕する者である一方、我々は子であり相続者であるという事実に留意するだけに止まってしまう。相続人が子供である間は、僕として監督の下にいる。その人が成長した時、彼は家の主人となるのである」〈ヘブル 1:14、ガラテヤ 4:1, 2 参照〉(ヘブル書、90-92 ページ)。

人間の創造とルシファーの墮落のかかわり

1. この特別な種類の被造物を創造する計画は、世の初めに、いかなる被造物も存在する前から神のみ心にあった。(エペソ 1:4, 5, 3:11 参照)

2. その計画は、ルシファーが公然と反乱を起こす前に、天で発表された。「しかし、神が、み子に、『われわれにかたどって人を造』ろうと言われたときに、サタンは、イエスをねたんだ。彼は、人間の創造についての相談にあずかりたいと考えたが、相談を受けなかったために、彼の心は、しっととねたみと憎しみに満たされた。彼は、天において、神に次ぐ最高の榮譽を受けたいと思った」(初文 254)。

3. ルシファーが天から追放されるとすぐに、人間を創造する計画は実行に移された。「天使たちは、これまで幸福と祝福を分かち合ってきた仲間の天使たちの運命を悲しんだ。天では彼らの失われたことが感じられた」。

「こののち天父は、人間をつくって地上に住ませる計画をすぐ実行することについて、み子に相談なされた。神は、人間が永遠の生命を確保する前に、彼らを一応ためしてごらんになることになった。人間が神のよしとみたもう試みに耐えることができたなら、ついには天使と等しい者になるはずだった。人間は神の恩恵をあたえられ、天使たちと共にまじわるはずだった。神は、人間に不服従の能力をもたせないようにすることは適当ではないと、お思いになった」(生残 30)。(初文 255, 256 も参照)。

「恩恵期間(試験期間)中の天使たちは、サタンに欺かれ、彼によって天の大反乱に導かれ、キリストに敵対した。彼らは、彼らが耐えるべきテストに耐え損じて、墮落した。それからアダムは神のみかたちに創造され、恩恵期間(試験期間)のもとに置かれた」(RH 1874/2/24)。

人間の創造の目的に関する要点

1. 人間を創造する計画は、永遠の昔から神のみ心にあった。

2. 人間は、最初の被造物ではなく、最後の被造物であった。従って、人間というのは神の創造にいわゆる捺印をするようなものであった。神の目的において、人間は宇宙の秩序の中で一定の役割を果たすために創造された。

3. 意志の完全な自由が与えられた多くの種類の被造物の創造によって、神は罪の可能性に直面した。神はどのようにこの状況にうまく対処するであろうか。神は、**ちりから創造**されるにもかかわらず、**神の写しである被造物**を創造した。その後教育を通して、神は**人間を神のみ子と共に宇宙のみ座に座らせるまでに高める**のであった。この**新しい種類の被造物**、神の**創造の最高傑作**は、宇宙の中で罪は「不可能なこと」になるという方法で、神のご品性の栄光と知恵を全宇宙に示すのであった。

それゆえ明らかに、人間の創造は、**宇宙に神の新たな啓示**をもたらすのであった。まことに背教から宇宙を守る最高の啓示であった。

4. 人間の創造のためのこの計画が天で発表された時、ルシファーは、天父と内密の相談にあずかったイエスに嫉妬し、また創造主との密接な関係によっていつかは彼よりも優位に立つことになる人間に嫉妬した。

5. ルシファーと彼に共鳴する天使たちは、神の愛の律法に対して反乱を起こし、天から追放された。罪というものは、かつて天で知られていなかった。宇宙は危険にさらされることになった。

敏速に人間を創造する計画が実行に移された。宇宙が神のご品性の新たな啓示を受ける時が来た。人間は、神の栄光を示すために神のみかたちに造られた。人間は神をあがめて、エホバの律法への完全な服従を示すことによって神のみ座を擁護することになっていた。こうして、その律法に敵対するサタンの主張が暴露されるのであった。

全宇宙は、神が生命のない土からご自身のかたちに人を造られた時、深い関心をもって人間の創造を見守った。人間とのあらゆる関係において、創造主は愛、謙遜、無我をお示しになるのであった。それは、神は自分本位であるというサタンの主張（大下 240 参照）が永遠に解決するためであった。そしてその結果、人間も神への感謝と無我の愛によって応答するのであった。それによって、愛の律法への服従の新たな啓示が宇宙に与えられるのであった。こうして、全宇宙が一つの声をもって、神の律法の完全な義と美しさに同意する時、サタンと彼の部下たちは滅ぼされることになり、宇宙は背教に対して永遠に安全となるのであった。

人間の力や能力

1. 人間の能力は三つの部分からなる。

「どの能力も皆、一肉体、知能、道徳の能力—訓練される必要がある」（5T 522）。

第1課 人間の創造

「キリストは、肉体、知能、道徳の能力が結合した全人的な奉仕をお求めになる」(6BC 1087)。
〈青年 232、3T 157、3T 51、ミニ 99、98 も参照〉

「アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能と霊性は、神のみかたちをそなえていた」(教育 4)。

(注：これらの重なり合う三つの能力とは、肉体、知能、道徳、あるいは肉体、知能、霊性、もしくは、肉体、知力、道徳(霊性)を示している。「道徳力」という表現は理性の力を意味しており、その機能は正しい行為や誤った行為に関係するものである。この力のことを霊性の力と呼ぶのも適切である。ウェブスター英語辞典(Webster's New Collegiate Dictionary)は、「spiritual(霊性)」とは「理性の知力と高い才能」と関係し得ると述べている。)

肉体の力 ー人間の構成全体。

知能の力 ー脳の構成全体。知力の才能のすべてが存在するところ。すなわち、判断力(理性)、観察力、洞察力、再考する力などである。

道徳の力 ー霊性の心の構成全体。あるいは、4T 85 で表現されているように心の「道徳の機械」。すなわち、**道徳と霊性の領域**には、**思考する機能、意志の機能、感情の機能**などがある。

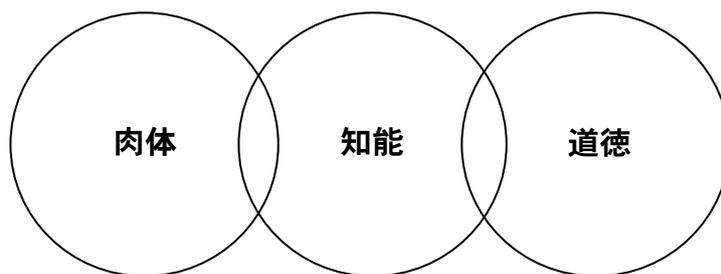
2. 神のみかたちに造られている。

「主なる神は土のちりで人を造り」(創世記 2:7)。「造り」という表現にしっかりと留意すべきである。他の被造物は、神が言われて存在するようになった。「神の写し」となるべき、この特別な種類の被造物はそうではなかった。人間のあらゆる力や能力は、「神に似せて造られた」。人間の肉体は神のみかたちをそなえていた(教育 4、あ上 20)。その精神も神のみかたちをそなえていた。「神にとって、人間を創造し、精神を造ることはすばらしいことであった。・・・神は人間を、彼らのすべての能力が神の精神の能力となることができるように創造なさった」(6BC 1105)。

肉体、知能、道徳の力の結びつき

我々が肉体、知能、道徳の力の結びつきを理解することは非常に重要である。それを理解しなければ、第三天使のメッセージの多くの重要な側面を理解することはまったく不可能になる。

もし人間の構成の三つの分野を下記のように表現するならば、

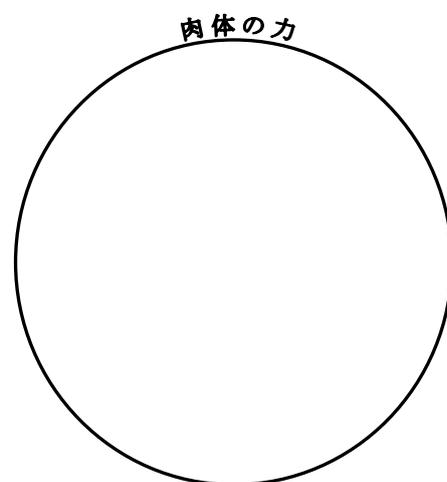


誤解を招く図解となってしまう。上の図は、人間の能力間のある程度の相互関係を示している。しかしその相互関係は、この図が示しているものよりも、もっと親密である。そこで、我々は正しい置き方を下に説明する。

1. 肉体の力

人間は、神のかたちに造られてはいるが、本来基本的に土のちりから造られた物質的構造物である。肉体の機能でない人間の機能は、一つもない。

例えば、思考することは肉体の機能である。肉体である脳の機能だからである。思考することは大部分、化学作用であることが今日わかってきた。祈りを通しての神との交わりには肉体の機能がかかわっており、神は肉体の組織の媒介を通して我々とお交わりになる。



「全身の組織に通じている脳神経は、天が人と交わることのできる唯一の媒介であり、生命の奥底にまで作用する」(2T 347)。

こうした考え方は、第三天使の使命の「右腕」に特別な力を与えている。それは次の引用文からも非常に明白である。

「肉体は知脳や精神が品性向上へと発達するための唯一の媒体である」(ミニ 100)。

「心と魂は、肉体を通して表現されるのであるから、知的また霊的な力は肉体の力と活動によって大いに左右される。肉体の健康を増進するものはすべて強い精神と均斉のとれた品性の発達を助長する。人は健康でなければ、自分自身に対する義務を、また人類同胞に対する義務と創造主に対する義務を、はっきり理解することも完全に果たすこともできない。したがって健康は品性と同様に忠実に保護されなければならない。生理衛生の知識はすべての教育の働きの根本でなければならない」(教育 232)。

従って、肉体の力を表す円は人間全体を包含しており、人は肉体の組織の中で生き、それを通して機能する。

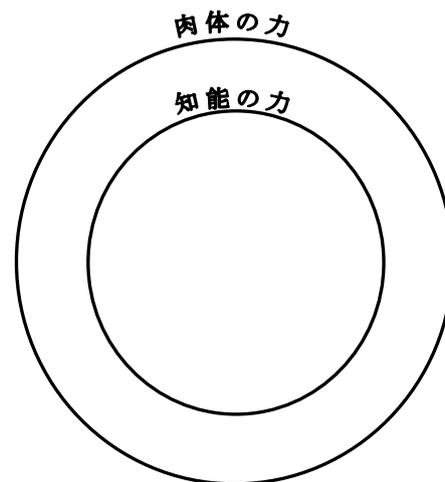
2. 知能の力

人間の知能の力は、肉体の組織の明確な一部分である。体に影響を及ぼすものは何であっても、必ず知能の力にも影響を及ぼす。

「健全な知性のためには、健全は身体が要求される」(5T 152)。「肉体をおろそかにすることは精神をおろそかにすることである」(3T 486)。

「不適切な肉体の習慣は・・・知的な良い訓練・・・に影響を及ぼす」(CT 299)。「肉体の健康を増進するものはすべて強い精神と均齊のとれた品性の発達を助長する」(教育 232)。

従って、基本的な円の内側に、知能の力を表すもう一つの円を描くことができる。



3. 道徳の力

精神の道徳の力は、知能の力の明確な一部分である。そしてそれは確実に、人間の肉体の組織の明確な一部分でもあることになる。それ故、体に影響を及ぼすものは何であっても、必ず道徳の力にも影響を及ぼす。

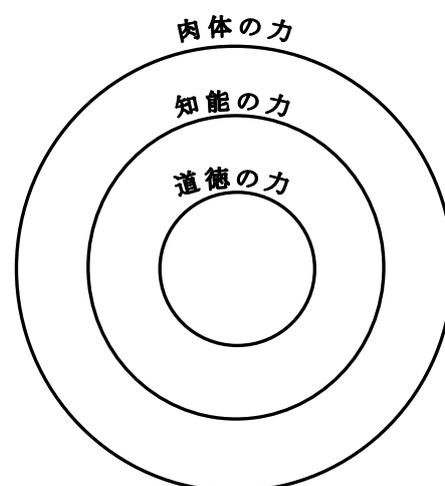
「知力と道徳の力は、身体の健康に依存している」(RH 1871/10/31)。

「肉体と道徳の健康は、密接に結合している」(健やか 54、226 番 〈一部改訳〉)。

「肉体と道徳的な性質の間には密接な関係が存在する」(食勸 151、254 番)。

「体力を減退させるものは、何であっても、精神を弱め」る(食勸 44、62 番)。

「健康を害することは、何であっても、身体の活力を減退させるばかりでなく、知脳の力や道徳の力をも弱める傾向がある」(ミニ 99 〈一部改訳〉)。



こうして、人間の道徳の力を表す三番目の円を描くことができるが、それは道徳の力が知能の力の一部分であるばかりでなく、実は基本的な肉体の組織の一部分であることを説明している。

高い性質と低い性質

「高い性質」と「低い性質」という表現は、人間の力や能力を分類するもう一つの方法である。「高い性質」は知能と道徳の力から構成されており、これらの力によって人間は神との交わりに入り、動物界の標準より上に高められる。

「低い性質」は人間の肉体的な特質に関係するもので、これだけでは人は動物界に属するものである。これらの特質は、人間の生来の食欲や動物的な性癖を含んでいる。「低い性質」それ自体には罪深いものがあるわけではない。「低い性質」は、高尚で聖なる目的のために人間に与えられたのであって、「高い性質」によって支配されることが神の意図されたことであった。

1. 高い能力が支配する。

「すべての動物的な欲望を、魂のより高い力に屈服させなさい」(ホーム 131)。

「もし啓発された知性がたづなをとり、動物的な性癖を統御してこれを霊的な能力に服従させるなら、人はちょっとした力で誘惑に打ち勝つことができるということを、サタンは知っています。……」(青年 233)。

「理性が食欲を支配すること、そして食欲がわたしたちの幸福に役立つことが、神の意図されたことでした。食欲は、きよめられた理性によって整えられ、支配されるときに、主に対して聖なるものとなるのです」(家教 406)。

2. 低い性質は高尚で聖なる目的のために与えられた。

「我々の動物的な性質の食欲は厳格に支配されていなければならない。この食欲は、重要な目的のために、善のために我々に与えられたのであって、それが歪められて戦う欲望となることによって死の手先となるためではなかった」(4T 244)。

「わたしたちの生来の食欲や好みは・・・神が定められたもので、人間に与えられたときには清く聖なるものでした。理性が食欲を支配すること、そして食欲がわたしたちの幸福に役立つことが、神の意図されたことでした。食欲は、きよめられた理性によって整えられ、支配されるときに、主に対して聖なるものとなるのです」(家教 406)。

⑨：高い能力の支配の下、低い能力は、魂の聖なる感情を生み出すことによって人間の幸福を増し加える。すなわち、賛美、感謝、喜び、満足、愛情などである。従って、低い能力は、高い能力を築き上げるために、また神と共に人間の潜在能力を高めるために与えられたのである。

命の息

「主なる神は土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった」(創世記 2：7)。

生ける人間を創造するときに二つのステップがあった。

1. まず、神は構成物をお造りになり、それに肉体的、知的、道徳的潜在能力をお授けになった。

第1課 人間の創造

しかしまだ、この組織には命がなかった。

2. その次に、神はご自分が造ったその組織に「命の息」を吹きいれると、組織は機能し始めた。すなわち、「人は生きた者となった」。

体（肉体、知能、道徳の力）＋ 命の息 ＝ 生きた者

神が人間にお授けになった命の原動力を意味するために用いられる二つのヘブル語がある：

1. Neshamah ネシャーマ（たいてい「息」と訳されている）

「命の息」（創世記 2：7）。

「地の上に動くすべて肉なるものは、鳥も家畜も獣も、地に群がるすべての這うものも、すべての人もみな滅びた。すなわち鼻に命の息のあるすべてのもの、陸にいたすべてのものは死んだ。」（創世記 7：21, 22）。

「・・・全能者の息はわたしを生かす」（ヨブ 33：4）。

「・・・鼻から息の出入りする人・・・」（イザヤ 2：22）。

「あなたの命（欽定訳では「命」ではなく「息」）をその手ににぎり、あなたのすべての道をつかさどられる神」（ダニエル 5：23）。

2. Ruach ルアーク（たいてい「息」または「霊」と訳されている）

「・・・命の息のある肉なるもの・・・」（創世記 6：17、7：15, 22）。

「・・・およびすべての人の息は彼の手のうちにある」（ヨブ 12：10）。

「・・・あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは死んでちに帰る」（詩篇 104：29）。

「その息が出ていけば彼は土に帰る・・・」（詩篇 146：4）。

「・・・彼らはみな同様の息をもっている・・・」（伝道の書 3：19）。

「ruach ルアーク」はしばしば「霊」と訳される。これは、ヨブ 27：3、33：4、伝道の書 3：21、12：7にあるように「息」を意味する。また、詩篇 51：17、王上 21：5にあるように「気質」、あるいは、創世記 1：2、6：3のように「聖霊」を意味する。文脈を見て「ruach ルアーク」の適切な意味を決める。

新約聖書においては「pnueuma プネウマ」というギリシャ語が、ヘブル語の「ruach ルアーク」のように用いられている。

命の息は、すべて肉なるものに共通する。

上記の聖句から「neshamah ネシャーマ」及び「ruach ルアーク」は神によってすべての肉なるものに授けられていることがわかる人、鳥、獣、魚、這うもの。人間を異なったものにしたのは、異なった質の、授けられた「息」（命の原動力）ではなく、人間の組織に組み込まれた潜在能力であった。たとえば電流は、電灯、洗濯機、ストーブ、ジュースなどを作動させる。電気器具の

異なった機能を決めるのは、異なった電流の質ではなく、それらの器具自体に組み込まれている異なった潜在能力である。

魂

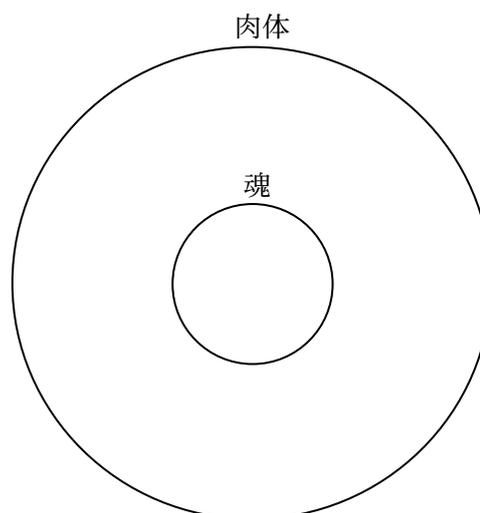
「人類の創造において、個性をそなえられる神の力があらわされた。神がご自分の像に似せて人を造られたとき、そのかたちはすべての点において完全であったが、生命がなかった。そこで個性をそなえておられる神が、そのかたちに生命の息を吹き入れた。そこで初めて人間は生ける、理性のある生物となった。人体のあらゆる部分が活動を開始し、心臓、動脈、静脈、舌、手足、感覚、頭脳、すべてが活動を始め、あらゆるものが法則のもとにおかれ、人間は生ける霊となった。神のみ言葉であるキリストを通じて、実在者である神が人間を創造し、知能をおさずけになられたのである」(ミニ 388)。

体 + 命の息 = 生きた者 (A Living Soul [生ける魂]) であるならば、

体 - 命の息 = 魂がない (No Soul) である。

ほとんどのキリスト教徒が信じていることとは反対に、神は体に魂を埋め込むことはなさらずに、「命の息」を人間にお授けになった。そこで人は生きた者となった。

魂に関する世間一般の概念では、魂は個別の、肉体から独立した存在で、下の図のように体の内部に閉じ込められているものである。



この概念では、タバコ、アルコール、豚肉、また他の健康によくない食物を体に入れようとも、体を弱める習慣があろうとも、あるいは、死が肉体に襲いかかろうとも、体の状態は魂に影響を及ぼさないと考えられている。しかし聖書は、すべて生ける肉なるものには魂があるということ、そして死は魂に襲いかかるということを明確に述べている。

1. すべて生ける肉なるものには魂がある。

(ヘブル語「Nephesh ネフェシュ」、ギリシャ語「Psyche プスケー」)

「水は生き物の群れで満ち」(創世記 1:20)。これは字義的に、「水は命の魂の群れで満ちよ」という意味である。

「命(魂)のある生き物」(欽定訳：創世記 1:20)。〈30 節を参照〉

「その中(海)の生き物(生ける魂)がみな死んでしまった」(黙示録 16:3)。

2. 魂は死ぬ。

第1課 人間の創造

ヘブル語では、「Nephesh ネフェシュ」の主な訳の仕方は：

魂・・・・・・・・428回
命・・・・・・・・119回
者・・・・・・・・28回
自分・・・・・・・・19回
死（体）・・・・8回

すべての場所で「Nephesh ネフェシュ」に死が用いられていることは興味深い。

- 魂：** 「罪を犯した魂は必ず死ぬ」（エゼキエル 18：4）。
- 命：** 「わたしたちの命を救って、死を免れさせてください」（ヨシュア 2：13）。
「あなたは自分の命と家族の命を失うようになるでしょう」（士師記 18：25）。
「彼は私の命を求めておられるのでしょうか」（欽定訳：サム上 20：1）。
「今わたしの命を取ってください」（王上 19：4）。
- 人（者）：** 「人を殺した者」（民数記 31：19）。
「人を殺した者」（民数記 35：11, 15, 30）。
「罪なき者を殺す者」（申命記 27：25）。
- 自分：** 「自分の死を求めて言った」（王上 19：4）。
「（自分が）死ぬことを願って」（ヨナ 4：8）。
- 死（体）：** 「死体に触れて身を汚したために、」（民数記 9：6）。（9：7、9：10も参照）
「死人のところに、はいつてはならない」（レビ 21：11）。〈民数記 6：6、19：13、ハガイ 2：13も参照〉

ギリシャ語では、「Psuche プスケー」は下のように訳されている：

魂・・・・・・・・58回
命・・・・・・・・40回
精神・・・・・・・・3回
心・・・・・・・・1回

「Psuche プスケー」は破壊することができると言明されている。「また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい」（マタイ 10：28）。

「その中（海）の生き物がみな死んでしまった」（黙示録 16：3）。

「幼な子の命をねらっていた人々」（マタイ 2：20）。

「善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」（マルコ 3：4）。

「命を救うのと殺すのと」（ルカ 6：9）。

「彼らはわたしのいのちをも求めています」(ローマ 11 : 3)。

「海の中の造られた生き物の三分の一は死に」(黙示録 8 : 9)。

「死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった」(黙示録 12 : 11)。

まとめ：

新旧約聖書では、「魂」の基本的な意味は、「息をする生き物」である (Young's Analytical Concordance [ヤング・コンコルダンス] を参照)。「魂」という表現は、「者」、「個人」、「命」、あるいは人称代名詞「彼」、「私に (を)」、「私は (が)」、「あなた」などに対して慣用的である。

従って： 「あなた」に対しては「あなたの魂」が、
 「私」に対しては「わが魂」が、
 「彼」に対しては「彼の魂」が、
 「彼ら」に対しては「彼らの魂」が、
 「十人」に対しては「十の魂」が慣用的な表現である。

神が「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」(創世記 2 : 17)と言われたとき、彼は、人間の全体が意識のある、生ける者として存在することが止むということの意味された。

聖書が人間の全体を意味するのに、「肉なるもの」、「霊」、あるいは「魂」と呼ぶことに気づいていただきたい。それはちょうど我々が人の全体を意味するのに、その一部分のことを言うのと同じである。すなわち二十人を意味するのに、「二十の頭」と言ったりする。イザヤが「すべての人 (欽定訳：すべての肉なるもの)」(イザヤ 66 : 23)という言葉を用いたとき、彼は息のない体のことを言ったのではなかった。同様に、パウロまたはペテロが「霊」という言葉を用いたとき、彼らは体とは何か別のものを言ったのではなかった (ヘブル 12 : 23、I ペテロ 3 : 19)。

全人=人間全体

器官や能力は完全に発達していた。

「彼 (アダム) は完全な人間としての力をもっていて、心もからだも活力に満ちていた」(希上 124)。

「彼 (アダム) は神のみ前における完全という力の内に立った。彼のあらゆる器官や能力は等しく発達していて、調和と釣り合いがとれていた」(ISM 267)。

「神は、人間を最初に正しい者としてお造りになった。彼は完全に調和のとれた精神の状態に創造された。精神の諸器官の大きさと力は、完全に発達していた。アダムは人間の完全な模範であった。精神のあらゆる特質は釣り合いがとれており、それぞれ特有の役割があったが、一つ一つの特質の完全な本来の機能のために、お互いに依存し合っていた」(RH 1886/7/27)。

アダムの器官と能力の機能は完全。

人間は、地上のすべての生き物と共に肉体の生命を経験するために「命の息」にあずかる者となったばかりでなく、聖霊によって神ご自身の命に共にあずかる者ともなったのである。彼は肉体の命をもっていたばかりでなく、霊的な命ももっていた。神の愛の霊で満たされて、人間は神から与えられたあらゆる能力を用いて、自分の創造主の栄光をたたえた。

1. 人間は罪なき生涯を生きるために神から力を受けた。

「彼らは、あらゆる力の源であるお方から力を受けて、天との密接な交わりの内に生きることになっていた。神に支えられて、彼らは罪なき生涯を生きるようになっていた」(RH 1902/2/11)。

2. 人間は神の性質にあずかる者。

「神はアダムをご自分の生命、ご自分の性質にあずかる者とされた」(1BC 1082)。

3. 人間は霊で満たされている宮。

「我々は神の作品であり、御言葉は、我々が『恐るべく、くすしく造られた』ことを宣言している。神は**精神 (mind)** のために、この生きた住居をお備えになった。それは、聖霊が宿るために、主ご自身が据え付けられ、『念入につづり合わされた』宮である」(健やか 7, 8, 4 番)。〈希上 186 参照〉

4. 人間には悪の傾向はなかった。

「最初のアダムには、墮落した原則、墮落した性癖あるいは悪への傾向がなかった。アダムは、神のみ座の前で天使と同様に欠点がなかった」(1BC 1083)。

「神は、アダムを悪の傾向を持たない、純潔で気高い者とされた」(1BC 1084)。

「神は、人間を正しいものに造られた。神は、人間に悪の傾向のない気高い品性をお与えになった」(あ上 25)。

5. 人間は純潔で、光の覆いを着ていた。

「人間は、外観においても、品性においても、神のかたちを保っているはずであった。キリストだけが、天の父の『本質の真の姿』ではあるが、人間は、神に似せて造られたのである(ヘブル 1:3)。彼の性質は、神のみ旨と調和していた。人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしていて、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった」(あ上 20)。

「人間が創造主によって造られたとき、彼は背が高く、完全に均整がとれていた。彼の顔は、血色がよく、生命と歓喜の光に輝いていた。アダムの身長は、今日のだれよりも、はるかに高かった。エバは、アダムよりは少し低かったが、その姿は気高く、美しかった。罪のない彼らふたりは、手で造った衣服を身にまとっていなかった。彼らは、天使が着るような光と栄光の衣をまとっていた。彼らが神に従って生活するかぎり、この光の衣は、彼らをおおっていたのである」(あ上 20)。

6. 人間は全身を尽くして神に応答した。

「彼らは、無限の知恵と知識とを告げている創造の秩序と調和をみとめ、エデンの園の美しさと栄光を絶えず、つぎつぎに新しく見いだした。すると、心はますます深い愛に満たされ、唇からは、創造主に対する感謝と尊敬のことばが語られるのだった」（生残 34）。

「天使たちは、アダムとエバと一緒に、調和した音楽の聖なる調べをうたった。彼らの歌声が幸福なエデンからひびき渡って来ると、サタンは天父とみ子にささげられるよろこびに満ちた賛美の調べを耳にした。サタンはこれをきいて、ねたみと憎しみと悪意をつのらせ、どうしてもアダムとエバに不服従の念をあおって、たちまち神の怒りを彼らの上にもたらし、彼らの賛美の歌を創造主に対する憎しみとのろいに変えてしまわなければならないと、部下の天使たちに語るのだった」（生残 44）。

「彼らが神の律法に忠誠をつくしているかぎり、彼らの知って、理解を深め、愛する能力は、絶えず啓発されるのであった。彼らは、常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます、明瞭な観念をいただくようになるのであった」（あ上 27）。

7. 人間は顔と顔を合わせて神や天使たちと交わった。

「彼らは、天使たちの来訪を受け、何の隔てもなく、創造主と交わることを許された」（あ上 26）。

「創造主と顔をあわせて、心と心の交わりをすることが、アダムのとうとい特権であった」（教育 4）。

8. 愛が彼の全存在の基礎。

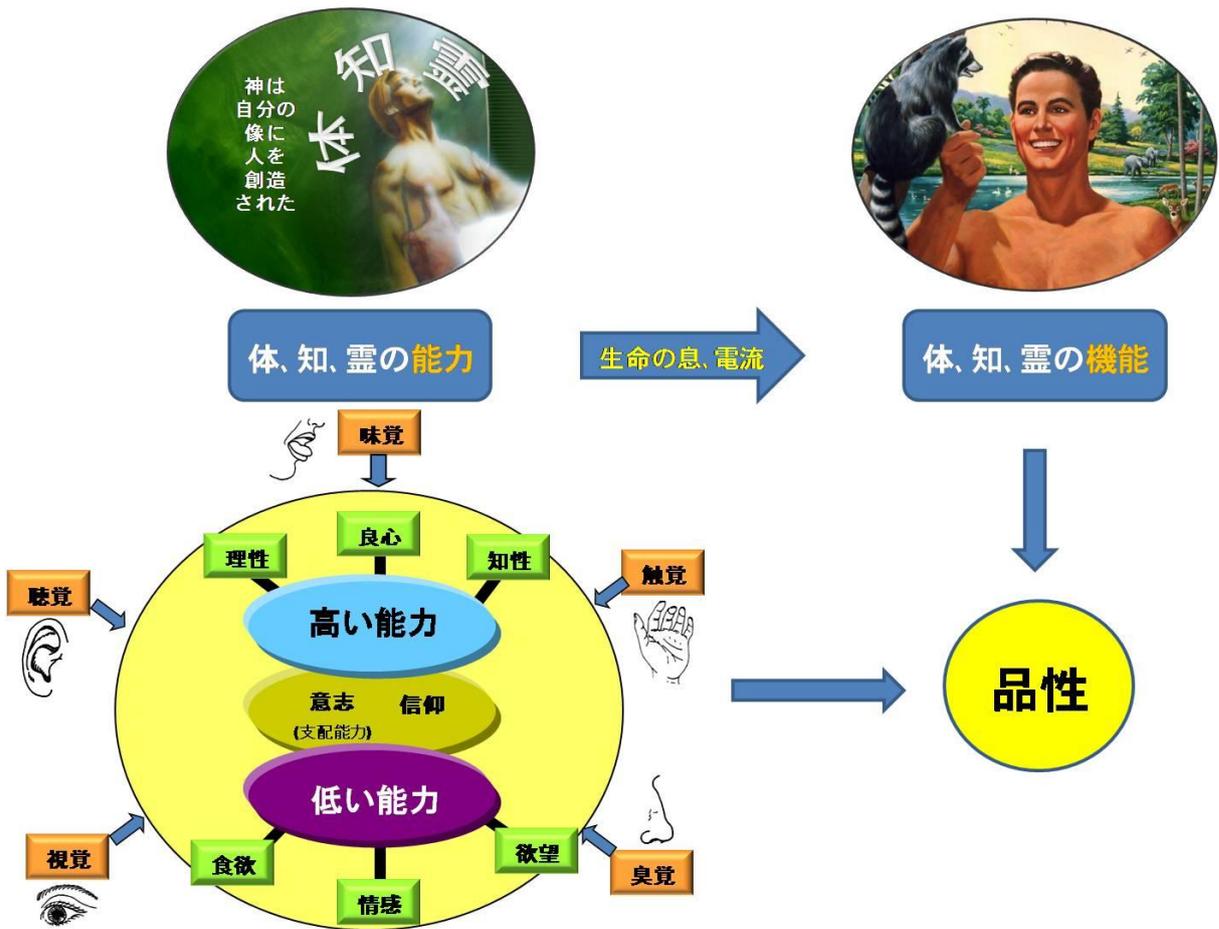
（CT 32 を参照）

研究課題

「聖所の清め」の持つ人間の創造の最初の目的との関係について話し合ってください。

ダニエル 8 : 14 及び黙示録 14 : 7 を参照。

- (a) 広義での「清められる」の意味。
- (b) 「聖所は義とされる、正しいとされる」（欽定訳：ダニエル 8 : 14 の欄外）の意味。
- (c) 「神に栄光を帰せよ」の意味。（黙示録 14 : 7）



人間の生と死



第2課 人間の墮落

参考：人あ上第4章、人間の尊厳第2章、聖所は清められる第2章、聖所の回復第3章

研究ガイド

「同時にまた悪の知識がはいつてきたために生じた人間の状態の変化と、人類の教育についての大きい御目的を今もなお成就されている神のご計画を考えてみる必要がある」（教育4）。

誘惑と墮落

1. 「アダムとエバが神の戒めにそむく者となり、この世に悪の知識をもたらしたのは、彼らが神の恵みを疑い、神のみ言葉を信じないで、神の権威を否定したからであった。それはまた、あらゆる種類の偽りや誤りに対して門を開いた」（教育16）。

2. 不信にはいつも自己称揚が続く。ローマ1：19-22にパウロが例証している。

「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」（新改訳：創世記3：5）。

エバはこの精神—自己称揚に負けた。

3. 自己称揚は自己崇拜であり、偶像礼拝である。それに続くものは何か。ローマ1：19-23に描写されている。自己に仕えることは、偶像礼拝の本質であり神との交わりから断たれる。なぜなら、神の品性は無我であるから。

4. 自己崇拜という偶像礼拝は必然と墮落に導く（ローマ1：23-32）。不信の精神、自己称揚は人間を恐ろしい墮落へと導いた。人間は、無垢と純潔の覆いを失った。

能力は変わらない、機能が変わる

1. 一般的考察。

人間の墮落は、新しい能力を創造したのではないことを知ることは最も重要な点である。墮落は、人間の能力に変化をもたらしたのではない。そうではなくて、その能力の用い方に変化が来たのである。神が与えられた素晴らしい能力は、神に栄光を帰すために与えられたのであって、無私の奉仕が全宇宙に教訓となるためのものであった。これらの能力は創造主のそれと似たものであって、それをサタンにゆだねることによって、自己のために用いられることになった。

2. 能力はゆがめられ、退化した。

「人を創造するにあたって神は高貴な性質を与えられた。彼は、よく均整のとれた心が与えられ、彼のすべての能力は調和がとれていた。墮落后、新たな能力（才能）が与えられたのではなかった。能力はアダムが高く、目的が清いときに、罪が入ってきた以前に与えられていた。墮落は人間の中に新しい能力、エネルギー、熱情を創造したのではなかった。そうすれば、神に責任をなすりつけることになるからである。これらの能力がゆがめられたのは、神の要求に対する不服従の故であった。愛情は置き換えられ、高く聖なる目的から低い目的、標準に変えられてしまった。人が改心して神につながると、正しい神との関係に入り、神に警告され、教えられ、パンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きようになる。イエス・キリストを通して直接の交わりに入る。こうして創造主の道徳的像が回復される。元々人間の愛情は神のみ心に完全に従っていた。しかし、それがゆがめられ、誤用され、不服従によって退化した」(RH 1887/3/1)。

3. 人間の能力の弱さ

「人の体力は弱くなり、知的な能力は低下し、霊的な眼はくもった」(教育 4)。

4. 知的霊的能力はまひした

「善と悪がいきりまじったために、彼の心は混乱し、知的能力と霊的能力はまひした」(教育 16)。

5. 全身が混乱

「罪によって人間の全身が障害をきたし、頭脳が乱れ、想像力が腐敗する。罪が心の能力を低下させ、外部からの誘惑に反応するものが心の中にあるため、人間は知らず知らず、悪に向かうのである」(ミニ 433)。

人間の機能に変化－完全墮落 (Total Depravity)

神から自らを離して、神の愛の律法を拒んだので、人間の機能を動機づける新しい法則を受けた。それは利己追求の法則で罪と死の法則である (ローマ 8 : 2)。

人が墮落することによって「愛は利己心と変わってしまった」(キ道 13)。「利己心は墮落の本

質である」(CS 24)。罪を犯して以来、「人間は…その性質は邪悪となり、サタンと敵対するのではなく、協調するようになった」(大下 243)。人間完全墮落説である。

しかし、これは人のすべての能力が完全に退化(墮落)したという意味ではない(罪深さというのは能力の状態に適用されるのではない)。人間の存在(機能)が全く罪深いのである。彼は新しい動機、新しい傾向、新しい衝動、新しい心の傾向によって支配されるようになった。

人間の心の罪深さ

注：次のセクションで、「性質 nature」「心 heart」「精神 mind」は同じことを描写している。「性質 nature」はしばしば、人間の心の性質と精神(霊)を表している。(OHC 278、CT266)。

1. 墮落した人間の性質(心、精神の性癖、気質)。

「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いていたのである。また、わたしたちもみな、かつては彼らの中において、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった」(エペソ 2:1-3)。

「人間は神の律法を犯したときに、その性質は邪悪となり、サタンと敵対するのではなく、協調するようになった」(大下 243)。

「人の性質には、悪への傾向がある」(教育 21)。

「一度誘惑に負けるならば、彼らの性質は墮落してしまいとうてい自分だけではサタンに抵抗する力も抵抗する気持ちも持てなくなってしまうのであった」(あ上 38)。

「サタンは人間の性質の破壊的な傾向を強める。彼はねたみ、嫉妬、利己心、むさぼり、悪意と高い地位への争いを持ってくる」(6T 238)。

「彼らの性質の腐敗....」(2T 74)。

「彼自身の中にある悪の力は打ち破られ」(教育 166)。

「人の性質の中には...ねたみ、しつと、残酷な不信頼がある」(3T 343)。

「自我—古い不服従の性質は....十字架につけられなければならない」(ST 1905/7/26)。

「生まれながらに神に遠ざかっています」(キ道 53)。

2. 墮落した人の心。

「人の心は悪に満ち」(伝道 9:3)。

「心はよるずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか」(エレミヤ 17:9)。

「すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」(マルコ 7:21-23)。

「人間の心には生れつきの利己主義と腐敗がある」(4T 496)。

第2課 人間の墮落

「人間の心は自分自身の真の状態に盲目である」(4T 93)。

「生まれつきの心は神の律法を憎み、聖なることに敵対する」(1SM 217)。

「肉の心は十字架につけられなければならない。それは道徳的腐敗に傾いている」(5T 267)。

「心の思いは純潔で清いものではない」(1T 440)。

「生来の心は神のことや、天や、天の事物について考えることを好まない」(家庭 580)。

「生まれながらの心は真理に対する憎しみに満ちている。イエスに対してもそうである」(ML 261)。

「生まれつきの状態の心は、清くない思いや罪深い欲情に慣れている」(スタディバイブル旧 860)。「愛は...生まれつきの心に生き、繁栄することはできない」(4T 256)。

「生まれつきの心は神に敵対して、明瞭な真理の証拠に抵抗する」(5T 341)。

「生まれつきの心の傾向は下降線に向かう」(4T 587)。

「生まれつきの心の中には、一生懸命に努力して成功すると、称揚されたり威張ったりする傾向がある」(スタディバイブル新 346)。

「人間の心は本来冷たく、愛なきものである」(祝福 26)。

「我々の心は生まれつき罪深い」(2T 710)。

「人間の心の墮落は理解されていない」(MM 143)。

「生まれ変わっていない者の心には、罪を愛する思いがあり、罪をいだいてその言い訳をする傾向がある」(大下 247, 248)。

「形式的な宗教は、生まれ変わらない心にとって魅力がある。カトリック教会の礼拝の虚飾や儀式は、魅惑的な力を持っており、それによって多くの者が欺かれる。そして彼らはローマ教会をほんとうの天の門と見るようになる。その足を真理の土台の上に堅く置いて、その心を神のみ霊によって新たにする者でなければ、法王制の影響に耐えることはできない。キリストについての経験的知識を持っていない幾千の者は、力のない形だけの敬虔さを受け入れるようになる。そのような宗教こそ大衆が望むところのものなのである」(大下 323)。

「抑制されない心には、安らぎと満足がない」(家庭 218)。

「ああ、なんと人間の心は欺瞞的だろう！ 悪と調和することが何と容易いことだろう」(2SM 78)。

「人間の心は、利己的で、罪深く悪性である」(RH 1885/5/5)。

3. 墮落した人間の心 (mind)。

神に対する敵意 ローマ 8 : 7

むなしい心 エペソ 4 : 17, 18

肉の思い コロサイ 2 : 18

神に敵対 コロサイ 1 : 21

知性も良心もくされている テトス 1 : 15

良くない思い、正しからぬ思い ローマ 1 : 28

4. 心の動機、傾向

動機：魂の二つの動機的原則は愛と利己心である。人間はこれらの二つ法則のうちのどちらか一つによって支配されている。愛は神のもので、人間は持っていないので、キリストから離れた最も高貴な行いもぼろ切れのようなものである（イザヤ 64：6）。

衝動：「利己心は人間の衝動の最も強い普遍的なものである」（CS 25）。

心の傾向、性向、性癖：

- ・生来の悪への傾向（FCE 329、教育 118）。「心の中の悪の傾向」〈1SM 122 参照〉
- ・不正への性向（EV 369、スタディバイブル新 391）。「引き継がれた宗教は、神には少しの価値もない。先天的後天的悪への傾向」（青年 56 も見よ）。
- ・不信への傾向（TM 516）。
- ・「私たちの生まれつきの性癖は神の聖霊によって矯正されなければ、その中に、道徳的死をもたらす種を持っている」（ミニ 438）。
- ・悪への傾向（家庭 30、6BC 1089）。
- ・オリジナルの罪への傾向（EV 192）。
- ・不服従への傾向（5BC 1128）。
- ・心をあかしに傾けさせ（詩篇 119：36）。
- ・「人間はサタンの奴隷であり、生まれつき彼の提案と彼の命令に従うように傾いている」（5T 294）。

好み、性癖：

「人の性質には、悪への傾向（bent）、すなわち自力だけでは抵抗し得ない一つの力が働いている」（教育 21）。

人間の心の細かい分析

「神はご自分の僕らが自分の心の**道徳的機構（moral machinery）**について精通するのを望んでおられる」（4T 85）。

心の道徳的機構は、思考の能力、意志、感情、良心に関連がある。間違った原則（罪と死の法則）は生まれつきの道徳的能力を支配している。その機能は全く罪深い。各々の能力の機能を調べてみよう。

1. 思想と想像

思想：

人間の思いはむなしい 詩篇 94：11（3T 82）

悪人の思いは主に憎まれる 箴言 15：26

悪い思いは心から出る マタイ 15：19

悪人の思いには神のことがない 詩篇 10：4

思うことはいつも悪いことばかり 創世記 6：5

思いは神の品性の誤解から暗くなり 希上 4

第2課 人間の墮落

利己的思い 2T 177
悪い光景を思いめぐらすのを好む 2T 410
間違った思想が間違った感情を生む 5T 310

想像：

すべての想像は悪いことばかり 創世記 6：5
幼い時から悪 創世記 8：21
むなしい想像 ローマ 1：21 (3T 82)
悪しき計りごと 箴言 6：18
神に逆らう思い II コリント 10：5
自己を中心に 2SM 236
不純 OHC 337
心の悪い想像 3BC 1145、RH 1888/6/12

2. 意志

意志は義を行うのに無能 ローマ 7：18
肉体の力を失うと意志を弱くする 希上 120
意志の力は衰え キ道 39
衰え、弱められた ミニ 173 (英文)
悪に抵抗する力がない MB 142 (E)、MH 429、8T 292

サタンの支配下にある。

「あなたの意志があなたのすべての行為の泉であることを忘れてはなりません。人の品性を形づくる上に非常にたいせつな要素であるこの意志は、人類が墮落した時にサタンの支配に帰し、それ以来サタンは絶えず人のうちに働いて、サタンの思うがままに意志をもたせ、行わせ、人を全くの不幸と滅びに至らせているのです。しかしいとし子イエスを罪のいけにえとして与えられた神は、その限りない犠牲のゆえに、神の統治の一つの原則を破ることなく、こう仰せになることができます。『あなた自身を私に従わせなさい。あなたの意志をサタンの支配からとり去って私に与えなさい。そうしたら私はあなたの意志を占領し、私の思うがままにあなたのうちに働いて志を立てさせ、わざを行わせることができます』と」(青年 149)。

3. 情緒 (愛情、パッション[激情])

人は神の愛への応答を見つけることはできない。

「人は、罪を犯す前には『知恵と知識との宝が、いっさい隠されている』(コロサイ 2：3) キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはやきよいことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしてしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人

は神のみ前では楽しむことはできません。かれらは、きよい者らとの交わりを避けようとし、たゞ天国にはいることが許されても、すこしも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。かれらは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとするでしょう。悪人は天国には入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたものではありません。それは、かれら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとってはやきつくす火であります。罪人は、自分たちをあがなうために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります」(キ道 13, 14)。

「私どもは自分の心を変えたり、自分で愛情を神にささげることはできません」(キ道 60)。

人間の愛情は誤用された (3T 385、2T 561)。

「愛情は置き換えられ、高く聖なる目的から低い標準に目的が変えられている。....もともと人間の愛情は、神のみ旨に完全に従っていた。しかし、それらは不服従によってゆがめられ、誤用され、墮落してしまった」(RH 1887/3/1)。

パッション、激情：強い感情、激烈、激しい、残忍、熱烈、性急、肉感的、熱狂、いらだち、強情、せっかち、利己的、利己心は最も強い激情 (CS 25)、強烈な、燃えるような。

思い（考え方）と感情の関係。

「考え方がまちがっていると、感じ方もまちがいます。考え方と感じ方は共に一つになって**道徳的品性を作りあげている**のです。もしクリスチャンとして、ものの考え方や感じ方を抑制する必要がないと心にきめると、悪天使たちの影響をうけ、彼らの存在と支配を招きます。自分の印象に屈服し、自分の思いが疑いや迷いやぐちにとらわれるとき、私たちは最も不幸な人間となり、一生は失敗に終わります」(青年 83)。

「もし我々の考え方(思い)に地上の問題や些細なことがらに夢中になることをゆるすなら、我々の心は不信、陰鬱、不吉な予感で満たされるでしょう」(CT 234)。

⑨：人間の考えが正しいと、すべての感情は清い。人間は神にあって十分に感情的満足を見出すように造られた。彼は全身をもって完全な喜びの感情をもって神に応答できた。自分の造りぬしとの交わりを維持する限り、彼は魂の聖なる感情—愛、喜び、平安、感謝、賛美、満足等々を経験した。

罪は人間の感情に混乱をもたらした。もはや人間は神に対して積極的な応答を見つけることは出来なくなった。しかし、人間は感情的な存在なので、感情から孤立して生きることはできない。従って人間は、神との交わりが断たれたので、自分自身とそして下等な性質に仕えることから感情的な応答を見出すことができるだけである。この状態では、彼は、魂の清くない感情を経験する—欲望、肉欲、恐怖、ねたみ、うぬぼれ、不満等々。最も不幸で自己破壊の状態にあり、真理の言葉を知るまでは自己改善に進んでいくことができない。「あなたはいのちの道をわたしに示される。あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみ

がある」(詩篇 16 : 11)。

4. 良心

汚されている テトス 1 : 15、16

良心に焼き印をおされている I テモテ 4 : 2

心は暗く、硬化 エペソ 4 : 18、19

弱い良心 I コリント 8 : 12

「良心は一度犯されると大いに弱められる」 2T 90

乱用-3T 148、 眠る-CT 340、 鈍感-3T 51、 だまされ-3T 457、 眠っていた(ヘロデ)-希上 277、 ゆがめられ-6T 387、 8、 無感覚-COL 279、 硬化-2T 468、 盲目-4T 31、 歪む-MM 142、 麻痺する-CD 426、 罪の重荷を負い-MYP 108、 死んで-2T 563、 無感覚-4BC 1165、 悩まされ-GW 213-5、 違反-2T 89-93、 凍える-3T 569、 悩まされ-2T 90、 弱く-CH 587、 冷淡-GC 378

下等な性質が高等な性質を支配。

生まれつきの人間は、高等な性質が下等な性質の奴隷となっている。

「また、わたしたちもみな、かつては彼らの中において、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった」(私たちの行状は自分の腐敗した、肉欲的な生まれながらの性質に支配され、詳訳聖書)(エペソ 2 : 3)。

「放縦によって動物的な傾向が強くなり、一方道徳的力がいつも徐々に弱くされていく」(5T 218)。

相続(遺伝)の法則

「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものは、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし」(出エジプト 20 : 5)。

便宜上、相続(遺伝)の法則を二つの見出しにまとめてみた :

1. 肉体的、知的、道徳的能力に関して。

肉体的な能力は遺伝するという事は自明の事実である。肉体的傾向あるいは動物的性質も遺伝する(CG 422、MH 130、CG 378、MYP 68)。下等な性質である食欲の耽溺が、自然の食欲を高等な能力との釣り合いを失わせてきた。しかし、これらの肉体的性質の傾向は、心(精神)が下等な性質の意志のとりこにおくことを許さなければ、罪深いものではない。人間は、肉体的能力を相続するように、知的、道徳的能力も相続する(2T 478、4T 30-31)。

アダムに関しては、彼の器官、能力は完全に発達していて、調和がとれていた(希上 124、

1 SM 267)。しかし、彼の子孫はそうではなかった。能力が衰えたばかりでなく、バランスがとれていなかった。下等な性質（食べることなど）の高等な性質との不均等はますます強くなっていった。人間はその祖先からすべての退化した器官を相続する。しかし、覚えていなければならないことは、このような能力の状態は罪深い状態を構成しないのである（4T 606）。

2. 悪い特性、性癖、気質、傾向。

人間は退化した能力を受け継ぐばかりでなく、心と品性の退歩した状態を受け継ぐ。ダビデは言った：「見よ、わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました」詩篇 51：5。「悪しき者は胎を出た時から、そむき去り、生れ出た時から、あやまちを犯し、偽りを語る」。まだ何も知らない新生児が考え、意志、感情を発達させるからでなく、子供の心の特性、性癖、傾向は罪深く、悪なのである。

悪い特性

「悪い品性の特性を受け継いだ」（6T 282）。

「遺伝的な品性の特性」（6T 167）。

「あなたの品性の特性を遺伝させた」（4T 495, 6）。

「好ましくない、遺伝的な品性の特性」（AH 106）。

「心のうぬぼれは、おそろしい品性の特性」（4T 377）。

「子供たちによって受け継がれたあらゆる品性の局面...品性の特性の欠陥や美徳がこうして現れてくる。...人間の品性の先天的、後天的欠陥」（FE 277, 8、実物 141、FE 265、AH 174、CT 115、COL 60、希中 124）。

悪い性癖、気質

「特別な気質と性癖を受け継いだ者たち」（9T 222）。

「ある者たちは彼らの性急な気質を後世に伝えた」（2T 74）。

「彼らの品性の欠陥はその特性を発揮し、彼らは自分たちの内に育つがままにされた悪い趣味や習慣や気質を、他の人々に伝えていきます」（家庭 291）。

心の悪い傾向、性向

「自分の性向と悪い傾向を子供に伝える」（ホーム 183）。

「品性の傾向は子供たちに伝えられる」（4T 439）。

「肉の心の生来の傾向」（8T 315）。

「人々は、自分たちの心を知らない。『心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか』（エレミヤ 17：9）。しかし、神は、人間の墮落した性質の傾向をご存じである」（あ下 375）。

「心の悪の傾向」（ED 111）。

「先天的、後天的悪への傾向...品性の」（7BC 943）。

「先天的、後天的悪への傾向が清められていない者たちもこのようである。その心は汚れか

第2課 人間の墮落

ら清められていない」(スタディバイブル旧 1059)。

「罪のオリジナルの傾向が心の中に」(EV 192)。

「アダムの子孫は、不服従の傾向をもって生まれてくる」(5BC 1128)。

まとめ：上記の言明は、人間の心の性質は、墮落していて遺伝的に罪深いということを証明している。人間は、罪人になるために生まれてくるのではない。生まれながら罪深さをもっているから怒りの子なのである(エペソ 2:3)。

完全墮落と生まれながらの「美德」

人間は生まれながら利己的である。「利己心は墮落の本質である(CS 24)。「キリストなしになされることは、ことごとく利己心と罪で腐敗している」。従って人間の心は完全に墮落した状態であることは明確である。我々は「サタン自身と全く同じく、どうすることもできない状態にある」(スタディバイブル新 338)。

しかし、その事実は、人間の性質に何の「良い特質」もないというわけではない。彼は、神につながってなお、良いことができる才能(資質)がある。退化したとはいえ、彼には肉体的、知的、霊的能力があり、神のみ像が僅かばかりある。やさしい衝動と愛情がある。

しかし、これらのものは、与えられたタラントであり、品性を構成しているものではない(4T 606)。「親切心、情け深い心、霊的理解のすみやかなことなどは、尊いタラントである」実物 328。いくらかの美德があるかもしれない。しかし、利己心という原則のゆえに、すべて、神の聖なるみ前で汚れたものとみなされる。従ってすべての人間の「美德」は「ぼろぎれ」のようなものである(イザヤ 64:6)。彼の中には「完全なところがな」い(イザヤ 1:5)。生まれつきの人間の良き行為は、「まったく汚れた衣のよう」だという。(イザヤ 64:6)。生まれながらの人は「義と縁のない者」である(ローマ 6:20)。彼は全く義を行うことはできないし、それは何のいさおしもない(ローマ 3:20、7:14)。生まれながらの人のことをパウロは「古き人」と呼んでいる(ローマ 6:6)。「情欲に迷って滅び行く古き人」である。回復、再生の希望はない。決して忘れてならないことは、福音はこの古い生命の回復を狙っているのではないことである。それはまったく新しい生涯を作るのである(ガラテヤ 2:20、希上 201)。

ただすべての人に行使される神の恵みだけが、隠れて働く、完全に支配しようとする悪の力から解放することができるのである(創世記 3:15、ヨハネ 1:9、ED 29)。神の抑制する御霊の力なしには品性の一つの特性も行使する自由を持ち合わせていない。人間の愛情、親切、寛容、気前よさ、友情、また他のどんな特質であっても、この世界を取り巻く恵みから離れては見られないものである。4人のみ使いが四方の風を解き放つ時、人間の性質にあるすべての悪の要素が解き放たれ、全宇宙は前代未聞の悪の光景を見るであろう。人間は激しい激怒の争いから守られるすべを持たないであろう。すべての人間の愛情は地上から消え去るであろう。その時、神なしには、人間は悪の塊であることがデモンストレーションされるであろう(大下 365-366 参照)。

肉体的、靈的生命

1. 肉体的生命

人間が罪の結果を負ったままにされると、彼はエデンの園で直ちに死んだであろう。しかし、人間が罪を犯すとキリストが身代わりとして介入なさった。人間は「世のはじめから屠られた小羊（黙示録 13：8）のおかげで生き続けることができたのである。肉体的生命はカルバリーの十字架のおかげによってのみ与えられているのである。キリストは、靈的と同じように肉体的な生命を与えるために天から下って来た生命のパンである。次の引用文は、人間が一刻一刻、肉体的存在が可能なのは十字架のおかげであることを示している：

「我々の食卓にある食品で、神が我々の生命維持のために供給して下さらなかったものはない。すべてのものに神の印と名が押し込められている。あらゆるものは、神のひとり子という言葉に尽くせない賜物の中に含まれ、それを通して、人に豊かに与えられる。み子は、これらすべての賜物が神の被造物に向かって流れていけるように、十字架に釘づけられたのである」（スタディバイブル旧 958）。

「あらゆる小さな種が土の中から芽をだし、生き始めるのは、神の直接の働きによるのである。すべての葉が成長するのも、すべての花が咲くのも、神の力によるのである」（スタディバイブル旧 853）。

「人間の自然な生体は神の監督の下にある。けれどもそれは時計のように、ねじが巻かれた後は勝手に自分で動かなければならない、といったようなものではない。心臓の鼓動による脈拍が次の脈拍を生み、呼吸は次の呼吸へとつながる。しかし、全存在は神の監督の下にある。『あなたがたは神の畑であり、神の建物である』。『神にあって我々は生き、動き、存在している』。一つ一つの鼓動、一つ一つの呼吸が、アダムの鼻孔に命の息を吹き込まれた神のインスピレーション（靈）である。それが「わたしは有る」といわれる大いなる永遠の神のインスピレーションなのである」（スタディバイブル旧 7）。

「自然をささえている同じ能力が人の中にも働いている。星や微生物をみちびくのと同じ大いなる法則が人の生命を支配している。体内の生命の流れを調節する心臓の働きを支配する法則は、魂の裁判権をお持ちになる偉大な英知の神の法則である」（教育 104）。

「『人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。……わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である』と主は言われた（ヨハネ 6：53, 55）。このことは肉体的な面において事実である。この世の生命さえキリストの死のおかげである。われわれの食べるパンは、キリストの裂かれたからだをもって買われたものである。われわれの飲む水は、キリストの流された血によって買われたのである。聖徒であろうと罪人であろうと、日ごとの食物を食べる者はだれでも、キリストのからだと血によって養われているのである。どのパンにもカルバリーの十字架の印がおさされている。どの泉にもカルバリーの十字架が反映している」（希下 141）。

2. 靈的生命

人間は生まれながらの罪深い状態で、靈的能力を持っている（ED 29）。しかし彼は靈的生命

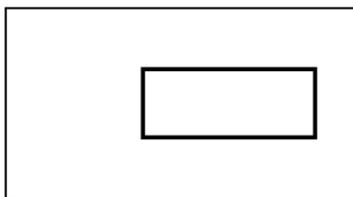
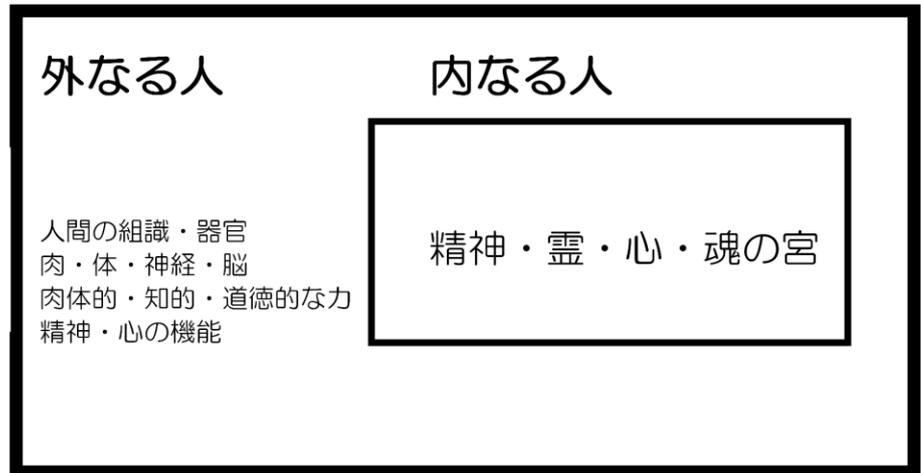
第2課 人間の墮落

を持っていない。彼の靈的性質は「罪過と罪に死んでいる」と書かれている（エペソ 2：1）。

人間は一刻一刻働く神の力から離れて肉体的生命がないように、靈的生命も、神との個人的な臨在と交わりから来る聖靈から離れてはない。肉体的生命において教訓を学ばなければ、靈的な面において教訓を学ぶことは困難であろう。生ける屍でしかない。死人が起きて歩けないように、義なる行為をすることはできない。生命のパンがなければ、肉体的に生きることが不可能なように、聖靈の息なしに靈的に生きることができない。

神はこの偉大な真理について古代イスラエルに教えようとされた。

研究課題：第3章の終わりの研究課題を見よ。

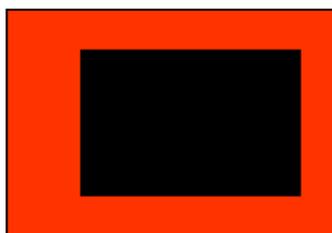


罪なきアダム

 退歩した状態

 完全な状態

 罪深い状態



生来の人